

田原本青垣生涯学習センター再整備基本構想(案)

青垣ネクスト プラットフォーム プロジェクト

人が繋がり居場所と出番と活力のあるまち



令和8年〇月
田原本町

目 次

はじめに	1
構想策定にあたっての理念	2
第 1 章 再整備の背景と必要性	4
1. 社会背景の変化	4
2. センターの現状と課題	5
3. ニーズの調査	8
第 2 章 再整備の方向性とコンセプト	12
1. 再整備の対象エリアについて	12
2. 目指す姿	12
3. 具体的な取組	13
4. 想定される効果	17
第 3 章 運営体制	19
1. 基本的な考え方	19
2. 民間と行政の役割分担	19
第 4 章 今後の進め方	22
1. 空間デザイン設計とコミュニティ育成を連携して進める考え方	22
2. 開館に向けたコミュニティの育成	22
3. 全体スケジュール	22

はじめに

■ 策定の趣旨

田原本青垣生涯学習センター（以下「本センター」という。）は、平成16年の開館以来、町の知と文化の拠点として、住民の自発的な学習活動を支えてきました。しかし、開館から20年以上が経過し、空調をはじめとする設備の老朽化に加え、社会情勢の変化や住民ニーズの多様化により、施設が抱える課題が顕在化しています。

また、私たちの暮らしを取り巻く社会環境も大きく変化しており、現在、本町は人口減少と少子高齢化という構造的な課題に直面しています。加えて、核家族化や共働き世帯の増加、地域との繋がり希薄化により、子育て家庭が孤立しやすい状況や、高齢者が地域との接点を失いやすい状況も生まれています。かつてはご近所同士でちょっとした世間話をしたり、困ったときに声を掛け合ったりする温かいふれあいの機会が減り、悩みを一人で抱え込みやすい社会になっています。

こうした社会環境の変化に加え、生活様式や価値観、人間関係、学習環境が多様化する中、こども・若者を取り巻く課題やその背景も複雑になっており、不登校の児童生徒への支援も重要な課題となっています。このため、全てのこども・若者が、学校や家庭以外にも安心して立ち寄り、自分のペースで過ごすことのできる地域の居場所を確保することが重要です。そこでは、読書や学習、遊び、交流、一人で落ち着いて過ごすことなど、それぞれの状況や関心に応じて過ごし方を選べることが大切です。また、地域の人や多様な世代と緩やかに繋がり、様々な学びや体験に触れることのできる環境は、こども・若者の健やかな成長を地域全体で支える基盤となります。

これからの公共施設には、単に行政サービスを提供する場としてだけでなく、人と人が自然に繋がり、交流や活動が生まれる場所（サードプレイス＝第3の居場所）としての役割が求められています。さらに、そこで生まれた繋がりが、一人ひとりの得意なことを活かす活動や小さな挑戦へと育ち、地域での支え合いや社会貢献、仕事や事業など、多様な形で地域の活力に繋がっていくことが期待されています。加えて、令和14年1月に開設が予定されている奈良県運転免許センター（以下「免許センター」という。）の移転は、本町にとって町外から多くの人を呼び込む大きな機会です。この機会を活かし、来訪者が立ち寄り、滞在し、地域内で消費や交流が生まれる仕組みを構築することは、地域の活性化や関係人口の創出に繋がります。

こうした背景を踏まえ、本構想は、本センターを従来の生涯学習施設としての機能を充実させるとともに、地域資源を活かした新たな価値を創出し、地域に交流と活力を生み出す「知と交流、そして活力の拠点（人・文化・地域を繋ぐハブ）」へと発展させることを目指すものです。住民にとって快適な「日常の居場所」でありながら、町外からの来訪者を含む多様な人々が集い、地域活動や社会貢献、仕事・事業など、それぞれの思いに応じ

た活動や挑戦を通じて、新たな繋がりや地域の活力が生まれる土台（プラットフォーム）となることを目指し、再整備の基本的な方向性を示します。

■ 本構想の位置づけ

本構想は、現在策定中の「田原本町第5次総合計画」（令和9年3月策定予定）との整合を図るものです。同計画がまちの将来像を支える3つの柱の一つとして掲げる

「人が繋がり居場所と出番と活力のあるまち」

— 年齢や性別、国籍、障がいの有無などに関わらず、誰もがこのまちに「自分の居場所」と「活躍できる出番」を持ち、いきいきとした活力を生み出せる環境を整える。また、「お互いさま」の心で支えあう地域のコミュニティを再構築し、一人ひとりが自分らしく、生きがいと幸せを感じて暮らし続けられる心豊かなまちを創り上げる —
という理念を、公共施設という具体的な「場」において先導的に体现する取組として、本構想を位置づけます。とりわけ「居場所」と「出番」、そしてそこから生まれる「活力」を、人々の幸福（ウェルビーイング）の向上を軸に据えながら実現することを目指します。

構想策定にあたっての理念

本構想は、変化する社会環境の中にあっても、田原本町を持続可能で魅力あるまちとして次世代へ引き継いでいくことを基本理念とします。今回の再整備は、単なる施設の老朽化対策ではなく、生涯学習を核としながら、人づくり・地域づくりを一体的に進める取組です。

そこで本構想では、本センターの目指す姿を、「**知と交流、そして活力の拠点**」と定め、これを実現するための視点として、次の3つを掲げます。

(1) 「居場所」と「出番」—— 誰もが自分らしく活躍できるまちづくり

核家族化や地域の繋がり希薄化が進む中、子育て中の親、仕事や学校で悩みを抱える人、退職後に地域との接点を探している人など、誰もが安心して身を置ける「居場所」の必要性が高まっています。同時に、一人ひとりが持つ知識や経験、技能を地域の中で発揮し、役割や生きがいを持って活躍できる「出番」を用意することが、人が支え合う地域社会を取り戻す鍵となります。本センターでは、この「居場所」と「出番」を一体のものとして育てていきます。

(2) 「学び」を地域の活力へ ―― 知と交流が生み出す新しい価値

学びや文化活動は、人を育てるだけでなく、新たな価値や交流を生み出す力を持っています。本センターでは、生涯学習機能を充実させながら、地域の歴史・文化資源や人材を活かし、そこで得た学びや知見を、趣味や地域活動、ボランティア、仕事・事業など、それぞれの思いに応じた活動や挑戦へと繋げていきます。免許センターの移転も大きな契機と捉え、来訪者との交流を、地域コミュニティの育成や関係人口の創出、地域経済の活性化（かせぐ力）へと繋げていきます。

(3) 2000 年の交流文化を未来へ繋ぐ

田原本町には、弥生時代の大規模環濠集落である唐古・鍵遺跡をはじめとする、全国に誇る歴史・文化資源があります。約 2000 年前、この地は人・物・情報が行き交う交流の拠点として栄え、その交流や活気が暮らしの豊かさを支えていました。その歴史に学び、現代においても本センターを、人と人、人と地域、そして人々の営みを繋ぐ「新たな交流の拠点」として発展させます。多様な人々が集い、そこから新しい活動や地域を元気にする小さな挑戦に繋がる好循環を創り出すことで、人口減少社会にあっても持続可能で選ばれる続ける田原本町の実現を目指します。

1. 社会背景の変化

本町の人口は、平成17年をピークに減少に転じ、今後も人口減少と少子高齢化が進行すると見込まれています。この構造的な変化は、労働力の減少や地域コミュニティの担い手不足、地域の活力の低下といった課題をもたらしています。本町の生産年齢人口の昼夜間人口比率は91.2%（令和2年国勢調査）であり、町外へ通勤通学する人が多い状況にあります。地域内で働く場や事業の機会を広げることも、まちの活力を高める上で重要です。

また、人口減少と同時に進んでいるのが、暮らしの中の「繋がり希薄化」です。核家族化や共働き世帯の増加により、子育てを身近に相談できる相手がいない家庭が増え、保護者が孤立感を抱えやすくなっています。また、高齢者や単身世帯をはじめ、地域との接点を持ちにくい人が、身近な場所で緩やかに人と繋がる機会を確保することも重要になっています。第3期田原本町子ども・子育て支援事業計画に係る住民アンケートでは、子育てしやすいまちとなるために重要なこととして「子どもが安心して暮らせる環境の整備」（50.7%）、「放課後の子どもの居場所づくりの充実」（49.5%）が上位に挙げられました。

また、第2期田原本町地域福祉計画・地域福祉活動計画に係る住民アンケートでは、地域活動に「活動したことがない」と答えた方が57.7%を占め、前回調査より増加しています。特に若い世代では地域活動への参加が低い傾向にあり、活動に参加していない方からは「参加するきっかけがない」「一緒に参加する仲間がいない」といった理由も挙げられています。こうした結果から、活動に関する情報や場所の提供に加え、住民が気軽に集まり、地域活動に関わるきっかけや仲間と出会える環境づくりが求められています。

これらの結果からは、住民が地域との繋がりや地域課題の解決を望む一方で、その思いを具体的な活動に繋げるための「場」と、それを後押しする仕組みが十分に整っていない状況がうかがえます。このため、誰もが安心して過ごせる「居場所」と、一人ひとりの経験、関心及び意欲を地域の中で活かせる「出番」をつくる、そして人と活動を結びつける仕組みを整えることが求められています。

さらに、まちが将来にわたって活力を維持していくためには、定住人口の確保に取り組むとともに、町外から継続的に関わる人々との交流を広げ、「関係人口」を育てていく視点も重要です。多様な世代や立場の人々が出会い、交流する機会を設け、そこから新たな活動や挑戦が生まれる環境を整えることは、地域コミュニティの再生と新たな活力の創出に繋がり、まちの持続可能性を支える基盤となります。

また、近年の公共施設に求められる役割も変化しています。これまでの公共施設は、行政が

目的やサービスを用意し、住民が明確な用事を持って訪れる「目的利用型」の施設として整備されてきました。しかし、人口減少や地域コミュニティの希薄化が進むこれからの時代には、従来の行政サービスや生涯学習の機会を提供する役割を大切にしながら、用事がなくても自然に人が集い、住民が自分たちの居場所として主体的に「使いこなす」ことのできる場へと発展させることが重要です。そこで生まれる出会いや交流を、新たな活動や地域の活力へと繋げていく役割も求められています。

本センターについても、従来の機能を維持・発展させながら、人と人、人と地域を繋ぎ、交流や活動が自然に生まれる「サードプレイス」としての新たな役割を加えます。さらに、そこで生まれた出会いや活動が、地域資源を活かした企画や小さな挑戦へと育つよう支える機能もあわせて備えることで、これまで以上に多くの人に利用され、地域に活力をもたらす施設へと再生していく必要があります。

2. センターの現状と課題

(1) 施設の概要

所在地	奈良県磯城郡田原本町阪手 233 番地の 1
設置年月	平成 16 年 11 月
敷地面積	約 21,000 m ²
構造	鉄筋コンクリート造（一部鉄骨鉄筋コンクリート造・一部鉄骨造）
階数	地下 1 階地上 4 階
建築面積	8,612.91 m ²
延床面積	13,447.70 m ² ・センター棟 13,113.18 m ² 、駐輪場棟 267.70 m ² 、車庫棟 66.82 m ²

(2) 施設の現況

本センターは、弥生の里ホール、唐古・鍵考古学ミュージアム、公民館、図書館を有し、住民の生涯学習活動を支援する複合施設です。

● 弥生の里ホール

客席 801 席、楽屋、シャワー室、音響・照明・映像システムを完備しています。利用目的に応じて客席が増減できる可変装置を導入し、舞台公演から式典・集会・展示まで、幅広く利用できます。

● 唐古・鍵考古学ミュージアム

唐古・鍵遺跡をはじめとする町内の遺跡から出土した遺物を展示しており、田原本町の歩みを見ることができます。

● 公民館

多様な学習意欲やニーズに応えられるよう、以下の部屋を備えています。

- ①視聴覚室 ②音楽スタジオ ③美術室 ④工作室 ⑤陶芸室 ⑥和室
⑦会議室 ⑧調理室 ⑨多目的コーナー ⑩パソコン学習室 ⑪研修室
⑫ボランティア室 ⑬託児室 ⑭フリースペース

※その他、施設内には利用者が憩える「中庭」を備えています。

● 図書館

ゆっくり読書が楽しめるように配慮した図書館です。収蔵可能冊数は約 27 万冊。読み聞かせが楽しめる「おはなしのへや」や、田原本の歴史が学べる「郷土資料コーナー」、自習もできる「個人席」などを備えています。

(3)施設の利用状況

令和 7 年度の利用状況は以下の通りです。

- ・ 公民館：年間利用者数 53,869 人（公民館稼働率 46.79%）
- ・ 図書館：年間貸出冊数 334,126 冊、年間個人貸出者数 85,486 人
来館者数 189,277 人
- ・ ホール：年間利用件数 284 件
- ・ 唐古・鍵考古学ミュージアム：9,015 人

(4)施設の課題

開館から 20 年以上が経過し、本センターは施設・設備の老朽化という物理的な課題に加え、これからの時代に求められる「滞在」「交流」「活動の創出」を支える機能が十分に備わっていないという課題を抱えています。

▶ 「滞在・交流」を生み出しにくい空間構成

現施設は「静かに学ぶ・閲覧する」ことを前提とした空間であり、飲食を楽しみながら長時間滞在できるカフェやくつろげるスペースが不足しています。来館者が立ち寄ってもすぐに帰ってしまう構造となっており、人の流れを地域内の交流や活動に繋げきれていません。

▶ 新たな活動や挑戦に繋がる機能の不足

これからの時代、人が集まる公共施設には、単に過ごすだけでなく、そこでの交流や学びを、地域活動や社会貢献、仕事・事業など、多様な活動や挑戦へと繋げていく機能が求められています。関係人口の広がりや、地域活動・社会貢献への関心、働き方の多様化、起業・副業への関心の高まりといった社会の変化を背景に、地域の中で誰もが小さな活動や挑戦を始められる場の重要性が増しています。しかし、現状の本センターには、こうした活動を支える機能がありません。仕事や作業ができるコワーキングスペースや、地域活

動、作品展示、チャレンジ出店・試作販売など、小さな一步を試せるスペースがなく、人が集まっても、その出会いを多様な活動や挑戦へと繋げる仕組みが備わっていない状況です。

▶ 利用者の固定化と多世代交流の不足

利用者の4割以上が60歳以上である一方、若い世代の利用は14.0%にとどまっています。子ども連れが安心して過ごせる場や、学生・社会人が集中して仕事や自習ができる環境が十分でなく、多世代が自然に交わる機会が限られています。また、地域活動への参加が十分に広がっていない状況を踏まえると、活動場所を用意するだけでなく、誰もが気軽に立ち寄れる入口と、人や活動を結びつける働きかけが必要です。

▶ 設備の老朽化と拠点機能への影響

空調設備の老朽化が進み、突発的な故障による利用制限のリスクを抱えています。本センターは指定避難所でもあることから、多くの人を安全に受け入れる基盤として、設備の更新と防災機能の強化が求められています。

(5)再整備の契機(免許センターの移転)

一方で、本町は本センターを取り巻く人の流れを大きく変える新たな機会を迎えています。本センターの道路を挟んだ隣接地には、令和14年1月に運転免許センターの開設が予定されており、年間20万人以上の来訪が見込まれています。現在の本センターにも年間延べ25万人が訪れていることから、将来的には本センター周辺に年間延べ45万人規模の利用者・来訪者が見込まれます。

しかし、単に多くの人を訪れるだけでは、それが直ちに地域の活力に繋がるとは限りません。重要なのは、こうした人の流れを「通過」で終わらせず、「滞在」「交流」「消費」「体験」へと繋げることです。例えば、免許センターを訪れた人が本センターに立ち寄り、地域の食や農産物、歴史や文化などに触れる機会をつくることが考えられます。こうした機会を継続的に生み出すためには、地元の生産者や事業者、地域で活動したい住民と、活動の場や来訪者を結びつける「繋ぎ役」が必要です。本センターでは、こうした繋ぎ役が地域の人と資源を結び、地元農産物の朝市やマルシェ、地域の食や歴史を味わう催しなど、多様な活動を継続的に展開していくことを想定しています。住民と町外からの来訪者が同じ空間で過ごすことで、新たな交流が生まれ、それが地域活動への参加や新たな挑戦、関係人口の創出に繋がります。

本センターを、住民の日常的な居場所であると同時に、町外からの来訪者と住民が出会い、地域との接点が生まれる「まちのプラットフォーム」へと再生させることで、交流人口の維持・拡大と関係人口の創出、地域経済の活性化に繋がっていきます。

3. ニーズの調査

本構想の策定にあたっては、住民が真に何を求め、この場所でどのような過ごし方や活動を望んでいるのかを明らかにするため、多角的な調査を実施しました。

(1) 実施調査

① 田原本町第5次総合計画策定に関する住民アンケート

田原本町第5次総合計画策定に関する住民アンケートによると、自習及びくつろぎスペースの設置、カフェの設置などを検討してほしいと意見が出ています。また、センターの利用に対する利便性を求める意見も散見されます。

<主な意見>

- ・レストラン、カフェでお茶などできる施設を作してほしい。
- ・同施設内のカフェが閉店しているので、読書しつつお茶できるスペース、大人のスペースがほしい。
- ・道の駅などの地域の農作物の販売、催し、朝市などしてほしい。
- ・飲食と会話可能にして24時間気軽に学べる場にしてほしい。
- ・勉強や情報収集に役立っているなので、今後も積極的に利用していきたい。

② 住民協議会での意見

令和7年12月14日から令和8年4月11日にかけて、計4回の田原本町住民協議会が開催されました。無作為抽出により集まった多様な住民が3つの分科会に分かれ、10年後の田原本町のありたい姿について活発な議論を交わしました。各分科会から、本センターに関わる提案として、以下のような意見が出されました。

<主な提案内容>

【地域の繋がりづくり分科会】

- ・住民が主体的に使いこなし、目的がなくてもふらっと立ち寄れる「余白のある多世代交流スペース（たまり場）」の創出（提案1）
- ・手芸や木彫りなど趣味を入口とした参加のハードルを下げる仕組みづくり（提案2）
- ・人と人を結びつける「繋ぎ役」の可視化と支援体制づくり（提案4）
- ・日常の楽しさ・共通の関心を起点としたやりがいのある活動づくり（提案5）

【かせぐ地域づくり分科会】

- ・免許センターの移転をきっかけに、寄りたくなるまちを住民×行政で共創する取組（提案1）
- ・食べる・遊ぶ・集まるを町内で実現するにぎわいづくり（提案2）
- ・歴史と食の魅力を紡ぎ、町のファンを増やす情報発信（提案3）
- ・小さな成功体験を積み重ねながら地域のリーダーを育む取組（提案6）

【未来を育むまちづくり分科会】

- ・住民の経験・特技を活かした「地域に開かれた学校」と子育て支援の仕組みづくり（提案1）
- ・住民が使いこなす「居場所」への転換と、多世代が安心して交流できる場づくり（提案2）
- ・受け手の目線に立った、情報が「届く」仕組みと「自分ごと化」の促進（提案6）

③ 利用者アンケートの実施

令和8年3月14日～28日にかけて、図書館の利用者に対して、アンケートを実施し、166件の回答をいただきました。

<主な意見>

- ・目的がなくてもふらっと立ち寄れる場所、おしゃべりや勉強ができる場所がほしい。
- ・子育て世代の室内遊び場や、シニアが毎日通えるサロン、学生の自習室がほしい。
- ・中庭にベンチやパラソルを置いて飲食や読書ができるようにしてほしい。
- ・中庭に遊具や砂場を置いて、子どもが遊べるようにしてほしい。
- ・図書館でコーヒーを飲みながら本を選んだり、親子で絵本を読み聞かせたりしたい。
- ・本を通じたイベント（読書会など）や、心地よい読書空間（ソファ、BGM）がほしい。
- ・町外利用者の制限を緩和してほしい。
- ・大人も夜間利用できる自習室、コワーキングスペースを設置してほしい。
- ・自分の作品や手づくりのものを、気軽に見てもらえる・置かせてもらえる場所がほしい。

(2) 求められているセンター像

これらのニーズ調査を総合的に分析した結果、これからの本センターの各機能に対して、以下のような役割が求められていることが明確になりました。

全 体	誰もが集い、それぞれの出番が生まれる場所へ ● 目的を問わずふらっと立ち寄れる「たまり場」の創出 用事がなくても利用でき、日々の暮らしに「心のゆとり（余白）」をもたらす居場所の確保。 ● 社会的な孤立を防ぐ、ゆるやかな見守りと支え合いの場づくり 子育て中の親や単身の高齢者などが、気負わずに人と関わり、悩みを一人で抱え込まずに済む関係が自然に生まれる環境の確保。 ● 「カフェ・飲食」機能の設置と滞在の質の向上 お茶を飲みながら読書や会話を楽しめるスペースの確保、および食事目的で訪れたくなる飲食機能の検討。あわせて、地域の農産物や加工品を活かしたメニューなど、地域の生産者・事業者と繋がる仕組みの検討 ● 多世代が自然に交流し、ゆるやかに繋がる環境の構築 子どもからシニアまでが長時間滞在でき、世代を越えた自然発生的な接点が生まれる場づくり。 ● 地域の魅力（食・農・歴史）に触れる機会の提供 地元農産物の販売（朝市・マルシェ）や、歴史資源を活用したワークショップ等の日常的な開催。 ● 「やってみたい」を試せる機会と、後押しする仕組みの整備 手づくりの品の販売や小さな出店、企画の実施などに気軽に挑戦でき、活動を続けたい人・仕事へ育てたい人を相談面から支える仕組みの確保。
公民館	「貸し部屋」から多世代が交わる「サードプレイス」へ ● 多様な過ごし方を可能にする機能の拡充 子育て世代の室内遊び場、シニアのサロン、学生・社会人の自習・仕事スペース（コワーキングスペース）の整備。 ● 音と目的に配慮した適切なゾーニングの実施 静かに集中したい人と、賑やかに活動したい人が互いに気兼ねなく共存できる空間の工夫。 ● 趣味や特技を活かした「出番」の創出 日頃の活動成果の展示に加え、作品の発表・販売や得意なことを「見せる・教える」場の確保。あわせて、地域の歴史・文化資源を題材としたものづくりや、地域の商品づくりに関わる活動の場としての活用。

中 庭	「ただの景色」から屋内と繋がる「屋外リビング」へ ● 自然を感じながら滞在できるリラックス空間の創出 ベンチやパラソルの設置による、屋外での飲食や読書、作業ができる環境の整備。 ● 屋内施設と一体となった「シームレスな動線」の確保 図書館の本を持ち出せるなど、施設間を自由に行き来できる利用ルールと動線の確立。 ● 親子がのびのびと過ごせる「安全な遊び場」の提供 保護者の見守りのもと、子どもたちが安心して遊具や砂場で遊べるスペースの活用。 ● にぎわいを生む屋外イベント空間としての活用 朝市やマルシェ、屋外での体験プログラムなど、地域の食・農・歴史の魅力を発信する催しが開ける場としての整備。
図書館	「本の貸出所」から、体験と交流を生む「知の拠点」へ ● 滞在そのものが楽しい空間づくり コーヒーを飲みながら本を選んだり、親子で気兼ねなく読み聞かせができたりする居心地の良い空間（ソファ、BGM など）の整備。 ● 本を通じた「体験」と「交流」の提供 読書会、テーマ展示、ビブリオバトル、コンシェルジュ機能など、本をきっかけとしたイベントやサポートの充実。 ● 現代のライフスタイルに合わせた利便性向上（DX 化） ネット予約や図書館以外での返却機能など、より使いやすいシステムへのアップデート。 ● 暮らしや活動を支える「調べる・学ぶ」機能の充実 地域の歴史や産業、起業や地域活動に役立つ資料・情報を身近に手に取れる環境づくり。 ● 地域を越えて親しまれる拠点づくり 住民の日常に寄り添う拠点として機能させながら、町外から訪れる方にも本町の魅力を感じていただけるような、おもてなしの心を持った対応。

第1章での検討結果から、本センターの再整備は単なる施設の長寿命化対策にとどまらず、社会の変化や住民のニーズに応え、田原本町の新たな「知と交流、そして活力の拠点」として再生することが重要です。

1. 再整備の対象エリアについて

今回の再整備にあたって、建物の構造を再確認したところ、公民館エリアは小部屋が多く、壁を取り払うなどの改装は構造上困難でした。そこで、図書館エリアが持つ「広々とした空間」という強みに着目し、この開放的な空間を最大限に活かすことで、効率的かつ効果的な再整備を行う方向性とししました。なお、本センターは耐震基準を満たしていることから、今回の再整備では、建物の構造体そのものの大規模な改修は想定していません。図書館エリアを中心とした配置の見直しと備品の再構成を主体とします。あわせて、屋内空間と一体的に活用できる中庭を、外でも本を読み、コーヒーなどを楽しみ、子どもたちが遊び、思い思いにくつろげる「屋外の憩いの広場」として活かすとともに、老朽化した空調設備等の更新や、指定避難所としての防災・安全機能の強化を図ります。

なお、本センターの再生は、空間を整えるだけで実現するものではありません。同じ空間であっても、誰がどのように運営し、どのような催しや活動を生み出すかによって、その場の価値は大きく変わります。そのため本構想では、ハードの再整備とあわせて、運用面の強化も一体で進めます。具体的には、開館時間や利用ルールなどの見直し、飲食や会話が可能なエリアの設定、部屋単位の貸出にとどまらない柔軟な使い方の工夫、活動を生み出し人と人を結ぶ「繋ぎ役」の配置、施設全体を使った催しの企画などを進め、既存の建物の価値を最大限に引き出します。とりわけ「繋ぎ役」は、活動したい住民と場を結ぶだけでなく、これまで接点の少なかった人や団体、地域資源を結び、新たな連携や活動が生まれるきっかけをつくる役割も担います。

2. 目指す姿

第1章で整理した課題とニーズ、そして本構想の理念を踏まえ、本センターが目指す姿を、あらためて次のように示します。

コンセプトは

「知と交流、そして活力の拠点」

これまでの本センターは、一人ひとりが静かに知識を得る「学びの場」として、多くの人に親しまれてきました。しかし、これからは、学んで終わるのではなく、その知識や経験、一人ひとりの得意なことを地域の中で活かし、新たな交流や、地域活動、社会貢献、仕事・事業などの多様な活動へと繋げていきたいと考えています。

この施設は、住民一人ひとりが安心して過ごせる「居場所」であると同時に、自分の知識や経験、特技を活かし、誰かの役に立つ活動や新たな挑戦に踏み出す「出番」が生まれる場所を目指します。そして、そうした一人ひとりの活動や挑戦は、人と人との繋がりを広げ、支え合いや社会貢献、文化活動、仕事・事業など、多様な形で地域に新たな価値を生み出していきます。

「知」を「交流」へ、そして「交流」を地域の「活力」へ。学びが人を繋ぎ、繋がりが挑戦を生み、挑戦がまちの活力を育てる、そんな好循環を育む拠点として、本施設を再整備します。

3. 具体的な取組

目指す姿を実現するため、本センターの空間を役割に応じた3つのゾーンとして再構成します。なお、ここでいう「ゾーン」は、建物の区画をそのまま示すものではなく、果たす役割ごとの空間のまとまりを表すものです。今回の整備では、広々とした図書館エリアの空間を活かしながら、その中に図書館ゾーンとコミュニティゾーンを重ね合わせるように配置します。3つのゾーンは、それぞれが独立した部屋ではありません。活動がゆるやかに重なり合い、併設するミュージアムとも有機的に結びつくことで、センターは単なる公共施設から、田原本町の未来を創る「青垣ネクストプラットフォーム」へと進化します。

整備の中心は、広々とした空間という強みを持つ図書館ゾーンです。この開放的な空間に、カフェやキッズスペース、コミュニティ活動の場を新たに設けることで、「本を借りる場所」から「誰もが集い、思い思いに過ごせる場所」へと転換します。その他のゾーンは、老朽化した箇所の修繕を行いながら、既存ストックを活かして再構成します。

なお、隣接するミュージアムについては、現状の機能を維持しつつ、各ゾーンや唐古・鍵遺跡史跡公園をはじめとする町内の文化遺産との連携を深め、地域の歴史・文化に触れる機会を広げていきます。また、歴史に関心のある人だけでなく、これまで関心のなかった人にも興味を持ってもらえるよう、展示や体験、催しなどを通じて、地域の歴史・文化を知るきっかけとなる取組を積極的に展開します。さらに、これらのゾーンは、年齢や障がいの有無にかかわらず誰もが使いやすいことを基本とし、普段から親しみのある場所が、いざという時には地域の指定避難所として住民の命と暮らしを守る、安全・安心の拠点としての機能もあわせて備えます。

既存の強みを生かし連携するゾーン

大きく生まれ変わるゾーン

3. 公民館・ホール・ミュージアムゾーン
(学びと発表の場)

2. コミュニティゾーン
(多世代交流拠点と出番の場)

1. 図書館ゾーン
(知の拠点)

- ④ 公民館 (会議室・工作室・美術室・音楽室・陶芸室等)
- ⑤ ホール
- ⑥ ミュージアム

- ① コワーキングスペース・学習室
- ② ホワイエ
- ③ 屋外広場

- ⑦ キッズスペース
- ⑧ カフェスペース

- ⑨ 図書館



1. 図書館ゾーン 知の拠点

本構想で最も重点的に整備するゾーンです。「静かに閲覧する場」から「居心地よく滞在し、本を通じた交流が生まれる場」へと転換します。本センター内のカフェスペースは独立した別空間となっていたため、コーヒーなどを飲みながら本を選べるよう、館内にカフェを設置します。

また、子どもがのびのび過ごせるキッズスペースもあわせて設け、読書会やテーマ展示など本を通じた体験・交流を積極的に提供するとともに、ネット予約や返却機能の充実など DX 化を進め、利便性を高めます。



2. コミュニティゾーン 多世代の交流の拠点と出番の場

子育て世代からシニアまで、多世代が自然に交わり、誰もが孤立せず安心して過ごせる「居心地のいい居場所（サードプレイス）」となるゾーンです。

かつて独立していたカフェスペースは「コワーキングスペース」として活用します。社会人のリモートワーク、地域活動の打ち合わせ、学生の自習など、目的に応じて自由に使える場とすることで、これまで足を運ぶ機会が少なかった世代も含め、日常的に誰もが気軽に立ち寄り、自然な出会いが生まれる環境を整えます。



そして、中庭や人が行き交うホワイエは、単なる空間ではありません。コーヒーを片手に本を読んだり、おしゃべりを楽しんだり、時には「チャレンジショップ」の小



さな店が並んで賑わいが生まれたり、用事がなくてもふらっと訪れてワクワクするような、自然発生的なコミュニケーションの空間として活かします。

また、子育て中の親同士が気軽に集まって楽しくおしゃべりしたり、日々の息抜きができる機会づくりをはじめ、趣味を活かしたワークショップや地元農産物の販売など、住民の小さな挑戦をあたたく後押しします。その際、「活動に関心はあるが、きっかけがない」「一緒に始める仲間がいない」という人も参加しやすいよう、趣味や関心を入口とした催しや交流の機会を継続的につくります。

「ちょっと試してみたい」という日常の中の小さな一歩が、誰かと繋がり、手応えを得ることで、地域活動や社会貢献、文化活動、仕事・創業など、次の活動へ踏み出す意欲へと育っていく。そんな一人ひとりの心の変化や次の一歩に寄り添い、活動の内容や段階に応じた相談、伴走支援、人や地域資源との繋ぎの仕組みを整えます。住民の「好き」や「得意」が地域の新しい活力や笑顔に繋がり、誰もが「出番」を感じながら、行くたびに新しい楽しみと出会える場所へと育てていきます。

3. 公民館・ホール・ミュージアムゾーン **学びと発表の場**

これまで地域の学びや活動を支えてきた公民館・ホール・ミュージアムの機能を、引き続き大切に担うゾーンです。老朽化した箇所の修繕を行いながら、既存ストックを活かして講座・サークル活動や発表・催しの場として活用します。図書館ゾーンやコミュニティゾーンとも連携し、日々の学びの成果を発表・共有できる場としても機能させます。

また、本センターでは、不登校または不登校傾向にある児童・生徒の学びと居場所を支える「やすらぎ教室」、陶芸、将棋、茶道、理科、プログラミングなどの体験機会を提供する「放課後子ども教室」、学習を支援する「地域未来塾」などに取り組んでいます。これまでの取組を活かしながら、今後も、こどもたちが安心して学び、多様な体験を重ね、成長できる環境を育んでいきます。

さらに、美術室・工作室・陶芸室、そして調理室といった「つくる」「味わう」ための設備は、本センターの大きな強みです。これらの部屋を、日々の講座やサークル活動の場としてだけでなく、地域の歴史・文化を題材としたものづくりや、食を通じた豊かな学びの場としても活かします。遺跡の出土品をモチーフにしたグッズづくりや、地元の食材を活かした料理教室、観光の記念となる品の試作など、学びと地域の魅力づくりが重なり合う活動を育てていきます。

こうした日々の学びやサークル活動の中で磨いてきた技術や、そこから生まれた作品・成果は、ホワイエなどでの展示や発表を通じて多くの人の目に触れ、喜びを分かち合い、次の活動へ踏み出すきっかけとなります。センター全体を縦割りにせず、知る喜びと交流、そして地域の活力が有機的に繋がる拠点として、一人ひとりの活動をあたたかく後押ししていきます。



4. 想定される効果

本センターの再整備は、施設を新しくすることそのものが目的ではありません。ここで生まれる交流や活動が、住民の暮らしやまちの未来にどのような変化をもたらすのか。想定される効果を、3つの視点から整理します。

● 住民一人ひとりへの効果 — 居場所と出番

年齢や立場を問わず、誰もが気軽に立ち寄り、心地よく過ごせる居場所が生まれます。子どもからシニアまで、すべての世代が心地よく過ごせる空間で得た心のゆとりが、学びや交流への意欲を呼び起こし、やがて自らの知識や特技を活かす「出番」へと繋がります。日々の暮らしのなかに、小さな挑戦と手応えが生まれます。

居場所
と
出番

● 地域・コミュニティへの効果 — 繋がりの再生

多世代が自然に交わることで、これまで接点の少なかった人々の間に新たな繋がりが生まれます。個人の活動がグループへ、グループが地域の活動へと育ち、支え合いや共助の輪が広がります。図書館・コミュニティ・公民館・ミュージアムの各機能が連携することで、まち全体の学びと交流の厚みが増していきます。

繋がりの
再生

● まち・地域経済への効果 — にぎわいとかせぐ力

町内外から人が集い、日常的なにぎわいが生まれます。住民の「好き」や「得意」から生まれた活動の一部が事業・起業へと発展することで、地域に新たな仕事や価値が生まれ、まちの経済を動かす力となります。こうした人の流れと活動の広がりが、田原本町の魅力を高め、まちの持続的な活力を支えていきます。

にぎわいと
かせぐ力

これらの効果は一過性のものではなく、次の「3つの連鎖」となって循環しながら、田原本町ならではの新しい日常を継続的に生み出していきます。

★「居場所」から「意欲」への連鎖

特定の目的がなくてもふらっと立ち寄れるコミュニティゾーンや図書館ゾーンで、心地よい時間を過ごし、心にゆとり（余白）を持つこと。その心の充電が、新しいことを学びたい、誰かと繋がりたいという「次の一步」への意欲を生み出します。

★「活動」から「自信」への連鎖

公民館・ホールゾーンでの日頃の学びや、ミュージアムで触れる地域の誇りを、

ホワイエや通路などで「見せる・伝える」こと。たまたま訪れた人に活動が認められ、感謝される経験が、住民一人ひとりの「自分らしさ」への自信と、確かな「出番」の実感に繋がります。

★「出番」から「地域の豊かさ」への連鎖

高まった意欲と自信を、地域活動や社会貢献、文化活動、試作販売、起業など、それぞれの思いに応じた具体的な活動へと繋げること。住民の「好き」や「得意」が、支え合いや新たな交流、文化的・社会的・経済的な価値へと広がることで、地域全体の豊かさと持続可能な活力を生み出します。

こうして「居場所（心の幸せ）」と「出番（活躍が生む地域の豊かさ）」が好循環を生み出す、田原本町ならではの新しい日常を、子どもからシニアまで、そして町外から訪れる人々も主役となり、皆さんと共に築いていきます。誰にとっても居場所と出番のある空間づくりを進めることで、すべての世代が心地よく過ごし、年齢を重ねても田原本町で安心して暮らし続けられるまちの実現を目指します。

第2章で描いたセンター像を実現するためには、それにふさわしい運営の仕組みが欠かせません。多様な世代や活動が集い、新たな繋がりが生まれ続ける場を、一過性のものとせず持続的に育てていくには、「誰が、どのように支えていくか」という視点が重要となります。本章では、本センターの運営を支える基本的な考え方と、その体制について整理します。

1. 基本的な考え方

本センターは、世代を超えて人々が集い、新たな繋がりと活動が生まれ続ける場を目指します。その実現には、「新しい活動や繋がりを生み出す力」と、「これまでの学びや活動を安定的に支える力」の両方が欠かせません。

そこで、本センターの運営は、民間と行政がそれぞれの強みを活かし、連携しながら支える体制を基本とします。行政は、地域の文化や歴史、地域が抱える課題を深く理解し、住民の暮らしに責任を持つ立場から、長期的な視点で積み重ねていく役割を担います。年度や担当者が変わっても活動が途切れないよう土台を支え、生まれた活動を地域の仕組みとして定着させていく力が、行政の強みです。

一方、民間は、企画力や情報発信力、他地域で培ったノウハウを活かし、社会の変化や利用者のニーズを的確にとらえながら、新たなサービスや連携についてスピード感をもって柔軟に展開する役割を担います。

変化に応える機動力と、変化を地域に根づかせる持続力。この双方を掛け合わせることで、時代の動きに柔軟に応えながら、長く地域に愛される拠点を目指します。

2. 民間と行政の役割分担

民間と行政の関わり方は、ゾーンの性格によって異なります。本センターでは、ゾーンごとに両者の役割を次のように整理します。

(1) 図書館ゾーン

図書館ゾーンは、これまで通り、行政による直営を基本とします。長年培ってきた運営方針や蔵書構成、郷土資料の収集・保存といった「まちの財産」を守り継ぐとともに、開館時間の工夫やイベントの企画など、サービスの充実を進めます。イベントの企画や来館者サービスなどの一部の取組については、民間の視点などを取り入れ、サービスの質と利用しやすさの向上を図ります。

このように、これまでの図書館の良さをしっかりと守りながら、新しい発想を少しずつ取り入れることで、住民に長く親しまれる図書館を目指します。

(2) コミュニティゾーン

新たな活動や繋がりを生み出し、住民のチャレンジを後押しするコミュニティゾーンでは、人材の発掘、人と人・人と団体、活動と地域資源を結ぶ「繋ぎ役」としての調整、情報発信といった「新たな活動を生み出す取組」を、民間への委託を基本として進めます。あわせて、コワーキングスペースの運営や、ホワイエでの展示・出店の企画、催しの立ち上げなども、民間の企画力と機動力を活かして進めます。民間が行政の補助的な立場にとどまるのではなく、その専門性や機動力を活かし、行政と対等に連携しながら、活動の創出を先導する役割を担います。

一方、生まれた活動を地域に根づかせ、続けていける形にしていく「継続・定着させる取組」については、官民が役割を分け合いながら、ともに担います。

民間は、活動を始めた人や団体に寄り添い、企画の相談や運営のアドバイス、人と人・活動と活動の繋ぎ直しといった伴走支援を継続的に行います。とりわけ、活動を仕事へと育てたい人や創業を志す人に対しては、専門的な知見やネットワークを活かした後押しを担います。

行政は、これまで公民館で育まれてきた学習活動を引き続き安定的に支えるとともに、新たに生まれた活動が一過性で終わらないよう、活動の場の確保や利用しやすいルールづくり、町の施策や関係団体との橋渡しを進めます。あわせて、商工会など地域の支援機関とも連携し、委託期間の終了後も相談や支援が続く体制を整えていきます。

このように、日々の伴走は官民がともに担い、その土台となる仕組みづくりを行政が受け持つことで、活動が途切れることなく育っていく環境をつくります。

さらに、こうして地域に根づいた活動の一部は、事業として自立し、地域経済を担う取組へと発展する可能性があります。こうした芽を見逃さず、起業や新たな事業への挑戦を希望する人に対しても、民間の機動力と行政の持続力という双方の強みを活かして後押しします。

民間の機動力と、行政の持続力。両者が施設コンセプトを共有し、それぞれの強みを持ち寄り、一体的に進めていきます。

(3) 公民館・ホール・ミュージアムゾーン

公民館・ホール・ミュージアムゾーンは、これまで通り、行政による直営を基本とします。公民館・ホールについては、長年にわたり、住民の学習活動やサークル活動、発表・交流の場として親しまれてきた役割を、引き続き安定的に支えます。講座やサークルの運営支援、貸館の受付、ホールを活用した発表会や地域行事など、これまで積み重ねてきた学びと発表の場を、変わらず守り継ぎます。そのうえで、より使いやすく、活動が広がる場となるよう、コミュニティゾーンで生まれた新たな活動と連携したり民間の視点を取り入れたりするなど、運営の工夫を少しずつ進めます。

さらに、これからの学びと発表は、文化祭のような限られた発表の機会にとどめず、日

常の活動そのものが自然と目に触れる、開かれたものにしていきます。本センター全体を活動のフィールドととらえ、決められた部屋の中だけで完結させるのではなく、施設のさまざまな場所で活動の様子が見えるようにします。そうした仕掛けを通じて、「誰かが何かに取り組んでいる」姿が日常の風景となり、それを見た人が次の活動へと誘われていくような循環を生み出します。

ミュージアムもこの考え方を体現する場です。郷土の歴史や出土品という「まちの財産」を守り伝えることを基本としながら、その魅力を展示室の中だけにとどめず、施設全体へと展示を広げる取組を重ねてきました。今後も、こうした「見せる」工夫を続けるとともに、郷土の歴史文化を担う次代の人材を育てていきます。守り伝え、次の世代へ繋ぐという両輪を大切にしながら、まちの歴史に親しむ人の輪を広げていきます。

このように、これまで親しまれてきた学びと発表の場をしっかりと守りながら、施設全体の繋がりの中で活かしていくことで、住民の活動を長く支えるゾーンを目指します。

本章では、これまで描いてきた構想を、どのような段取りで実現へと移していくのかを示します。とりわけ、官民連携という本センターの理念を「つくる段階」から具体化するため、空間デザイン設計とコミュニティ育成を連携して進めることを重視します。以下、その考え方、開館に向けたコミュニティの育成、全体スケジュールの順に整理します。

1. 空間デザイン設計とコミュニティ育成を連携して進める考え方

通常、施設の空間づくりと、開館後を見据えたコミュニティ育成は、それぞれ別に進められることが少なくありません。しかし、このような進め方では、実際の活動を見据えた視点が空間デザインに十分に活かされず、施設のしつらえと、そこで展開される活動に隔たりが生じるおそれがあります。

本センターでは、図書館をはじめとする各機能を活かしながら、人と人、人と活動の繋がりを育むことを目指しています。そのため、空間デザイン設計の段階から、コミュニティ育成を担う事業者の発想やノウハウを取り入れ、実際の活動を見据えた空間づくりを進めることが重要です。

こうした考え方から、令和8年度に空間デザイン設計とコミュニティ育成業務を一体的に公募し、両者を連携させながら進めます。これにより、利用者にとっての心地よさと活動の展開しやすさを兼ね備えた、統一性のある空間の実現を目指します。

2. 開館に向けたコミュニティの育成

開館はゴールではありません。多様な世代や活動が集い、新たな繋がりが生まれ続ける場を育てていく、その「スタート」が開館です。そこで、開館後の活動を円滑に始められるよう、開館前からコミュニティ育成業務を進めます。具体的には、地域の人や団体の繋がりづくり、活動したい人の発掘、担い手の育成、情報発信などに取り組みます。

民間の視点やノウハウを活かしながら、行政や地域の関係者とともに地域の課題やニーズを把握し、地域人材の発掘や繋がりづくりを進めます。図書館をはじめとする本センターの機能を活用し、開館時から様々な活動が動き出している状態を目指します。

3. 全体スケジュール

本構想の実現に向けて、令和8年度から具体的な取組に着手し、令和10年度中の開館を目指します。現時点で想定するスケジュールは、次のとおりです。

令和8年度：空間デザイン設計とコミュニティ育成業務を一体的に公募し、設計に着手

令和9年度：設計に基づく工事を進めるとともに、コミュニティ育成業務を先行して開始

令和10年度：新センター開館

なお、ここに示すスケジュールは現時点での想定であり、今後の設計や関係者との協議の進捗に応じて、柔軟に見直していくものとします。